

北京での危機管理

前北京日本人学校 校長

和歌山県西牟婁郡白浜町立白浜中学校 校長 川 村 康

キーワード：緊急対応，不審者対策，安全管理

1. はじめに

2007年3月14日北京空港に降り立った。職員が出迎えてくれ、学校バスで学校についた。空は灰色で木々の葉は落ち、草は枯れ全体が土色だった。雨があまり降らないので、乾燥して埃っぽく、針葉樹も土埃のため茶色になっていた。灰色の空はしばらく続いた。公害や黄砂などの原因で1年中こんな空なんだろうなと思った。実際、青い空は数えるほどしか見られなかったように記憶している。



オリンピック歓迎エール

2008年になり、オリンピックイヤーとなった。建築ラッシュが埃っぽさを助長していたが、建築はすべて中止、光化学公害スモッグ等の原因となる工場はすべて、郊外へ移転。排気ガスの原因である自動車は車番の一桁を奇数偶数にわけ、日にちの奇数日は奇数番号を、偶数日は偶数の番号を走行禁止とした。

このように徹底した取り組みで、空は一転した。2008年度は青空が少しずつ見られるようになり、帰国前の2009年は時々見られるようになった。もちろん400万台を超える自動車で渋滞も頻繁に起こるため、オリンピック後も、たとえば月曜日は1

桁0番と1番は運転禁止とするなどし、交通規制を行い、排気ガスの排出規制を今でも行っている成果とも言える。

この3年間はオリンピックを境に大きく北京が変化した期間ということが出来る。そのような転換期に北京で生活できたということは幸運だったといえる。

2. いつ何時

ある日学校に出勤すると、学校の正門前の道が直径1mのガス管交換のため掘りかえされている。道に掘りかえされた土が溢れ、大型バスが一台通れるか通れないかの余裕しかない。急いで生徒指導担当にいて、通常の不審者対策の配置以外に、特別に校門前の登校指導の先生を増やしてもらい、児童生徒を乗せてくるバスと子どもたちを降ろして帰るバスの誘導をお願いした。工事を始める前に何の連絡もなく、工事はしばらく続いた。いつ終わるのか何回か工事関係者に聞いたが明確な回答はなかった。

また、不審者等の対策として、下校の際に児童生徒が校門から出てすぐにバス等の乗り物に乗ることができるよう、学校の隣の外交部の用地を借りて大型バス等を駐車していた。旧のインターナショナルスクールの用地として使用していたので結構広い場所であった。4月の初めの新学期が始まる2日前、突然にこの用地の使用を禁止すると通告してきた。学校の校門前の道路には主に自家用車を止めるようにしていたので、ここに止めていた20台余りのバスを移動して止めるスペースはどこにもなかった。

大使館へ連絡を取った。大使館との相談後、外交部へことの次第を文章で記し、外交用地の使用禁止は一方的な通告で、こちらの対応も急すぎてできないということも含め、文章で返事を届けた。また、日本大使館にも同様のコピーを送付している旨を付け加えた。

外交部の局長が回答してきた。「今回の件は部下が勝手に判断をして、通知したもので外交部の上部の決定ではない。北京日本人学校とはこれまで教員の外交部のアパート借用など友好的関係を維持してきている。今回の件は撤回することにしたい。」との回答があった。

2009年10月、中国は建国60周年記念で軍事パレードが行われることになった。それに伴い9月に昼夜を問わず演習が行われた。夜の演習は特に支障はなかったが、午後の演習は大々的に行うため道路を封鎖した。そのため普段の下校時間では、バスや自家用車がアパートに帰れなくなるという事態が何度か発生した。結局大使館や日本企業の動向も参考にし、授業を午後カットしてこの事態を乗り切ることにした。

建国60周年記念の演習で影響を受けたのはこれだけではなかった。9月19日に予定していた運動会が建国記念行事を無事に行うために、できるだけ治安を保ち余分な騒動を起こさないため、また新型インフルエンザ感染の危惧も相まって、100人以上の集会の自粛と、集会をする場合の報告と許可申請を求めてきた。

北京日本人学校の運動会は児童生徒、父母、祖父母などがおおよそ3,000人位集まる。教育的で平和的な、しかも学校行事ではあるが、この規模の集会は開催の許可が厳しいだろうと予想した。大使館と相談し、大使館から直接当局に許可を申し入れて頂いた。幸い許可が下りたが、学校だけの申し入れでは許可が難しかったかもしれない。



運動会

また運動会についてはもう一つ問題が起こった。運動会は外国人が多く集まる集会（行事）という観点から、外国人の身の安全を守るため、毎年警察の警備をしてもらっていた。大変有り難いことである。しかし、60周年記念のときはこのことが思わぬ結果となった。9月19日はちょうど60周年記念の軍事パレードの総練習の日となっていた。当局から「総練習の警備に大勢の警察が必要なため北京日本人学校の運動会の警備が手薄になる。よって運動会は20日に延期したほうがよい。」との提案をうけた。それも確か1週間くらい前である。これについてはさすがに児童生徒の安全や保護者の皆さま等の安全確保を優先することでその提案を受け入れた。20日の運動会当日、早朝小雨がふり、決行するかどうか判断が難しかったが、天気予報等を参考に実施することにした。幸い8時前に雨がやみ、小学5、6年生以上で運動場の水を雑巾で吸い取り実施することができた。

専科証（中国で教員として授業をするための許可書）がないと授業できないということに中国全体ではなっているらしい。上海などの日本人学校はこれがある。北京は大使館付属ということからか専科証はこれまで不要だった。2009年3月末になって専科証があると北京市教育委員会から通知してきた。これまで北京日本人学校の教員はすべてこれをもっていなかった。新学期に専科証を取得できることはその時からでは不可能だった。

「授業ができない。」急いで大使館にこの話を説明し対応策を相談した。北京市教育委員会のスタンスはかわらなかったが、大使館から外交部のほうに相談してもらった。外国人子女学校ということからか、外交部の配慮で許可が出て授業ができるようになった。

新型インフルエンザH1N1型が2009年に全世界的に流行した。これまではH5N1型を想定して、大使館で頻繁に対策協議をしていた。これはメキシコから発生したもので、いつ北京にウイルスが上陸するのか大変心配した。当初はメキシコからの飛行便で中国上海や中国南部に帰国したものの中に感染者が数名でいるという報道があった。中国当局も完全に封じ込めるために、メキシコからの飛行便をシャットアウトしたり、感染者や濃厚接触者等を隔離したりした。

そうこうするうちに新型インフルエンザが日本で大流行した。北京日本人学校でも日本や外国への旅行者には1週間自宅待機をお願いし、登校は見合わせてもらった。これは北京日本人学校独自の対策ではなく、北京市衛生局がその方針で、一般に海外から中国に入った全員を対象に7日間の自宅待機をさせる方針であった。

学校では児童生徒にうがい・手洗いの励行や家庭での検温、放課後の教室などの消毒、来校者の検温等できる限りのことをした。しかし、流行を遅らせることはできたが、感染を食い止めることはできなかった。ある月曜日、1名の子どもが発症した。衛生局の指導で救急車で緊急入院することになった。問題は衛生局が感染者の濃厚接触者の自宅待機をどの程度の範囲で言うてくるのかということだった。その子が何日前までさかのぼって接触した人が濃厚接触者となるのか。それによって学級閉鎖しなければならないのか、学年なのか、全校なのか。衛生局の判断に委ねる以外になかった。幸い土日の交友関係のみに絞られ、数人の自宅待機で済ませることができた。

その後新型インフルエンザの感染は10月下旬をピークに広まったが、5月以降、注意喚起や協力要請事項、学級閉鎖や学年閉鎖、休校等の案内を20数回にわたって出した。その内容については運営理事長、運営理事会に常にご意見を伺いながら決定した。その日の午前中に文章作成し、正午までに運営理事長に相談、午後に保護者に配付という時間との戦いが何回もあった。

2009年度の冬には大雪がたびたび降った。普段は校門前の道路には100台を超えるバスや自家用車が止まっては次々と児童生徒を降ろし、奥の路地で旋回して帰っていくという具合で登校が始まる。その30mくらいの停車スペースにタクシーも夜には営業を終了し駐車していたが、朝になると営業に出て行くのだが、大雪のため営業できないのか駐車場まで大雪のため来ることができないのか駐車したままとなっている。これではバスが停車できない。急遽、生徒指導部所属の教員をこの停車スペースの手前にある三叉路に配置して、その場所でバス等を停車させ、児童生徒を下車させ、校門へと誘導した。タクシーは3、4日位動かなかった。その間特別配置は続いた。

3. 不審者対策

北京日本人学校の安全面に対する危機管理で最も重要な一つは不審者対策である。主に脱北者とみられる人たちが校内へ侵入することへの対応である。これまで学校への侵入が5回あった。1回目は2003年2月、2回目は2004年9月、3回目は2004年12月、4回目は2005年1月、5回目は2005年3月である。

そのような経過から、学校の塀を2mから5mに高くし有刺鉄線を張っている。当初3人だった警備員を16名に増やし、24時間体制で警備にあたっている。また、不審者情報が入るとその都度警備員の増強をしてこれに対応した。



北京日本人学校正門前

これまで子どもたちへの危害はなかったが、やはりいつどのような状況が発生するかわからない。北京日本人学校では不審者対策の避難訓練として管理職着任時、新任教員着任時、学校が始まってすぐの時期等に全校一斉の避難訓練を年に数回行っている。

避難訓練は生徒指導部が細部にわたり計画し、教職員、児童生徒がいつも本番さながら必死で行っている。訓練はいつも緊迫感があり、教職員は全力でその持ち場、持ち場で対応している。そしていつも訓練後の反省をし、微調整をする。

児童生徒が学校にいる間は子どもたちの安全確保の観点から、教職員は児童生徒の登校前には出勤し、休憩時間も教室等にいるなどの児童生徒の管理を行い、昼休憩は学校各所に配置につき、不審者侵入の際にも児童生徒を安全に誘導できるように危機管理を心掛けている。下校までこの緊張が続く。お陰さまで、ここ5年間は不審者の侵入はないが、近く韓国国際学校に侵入していることから油断はできないと考えている。

4. 安全管理

赴任前に、そして赴任後1年過ぎてから事故が起こった。全職員に指示し、教科の授業中やクラブ活動中、休憩

時間、掃除時間、登下校中などの活動中に考えられる危険や、また危険な場所などあらゆる時間、場所で起こりうる可能性を想定し、児童生徒の事故を防ぐ対策を考え、それを集約して、100項目以上の「安全マニュアル」を作成した。クラブ活動等では外部の専門家に意見を聞いて、マニュアルをより安全性の高いものにした。

危険箇所は当たり前だがその都度修理補修を行った。教職員からも危険と思われる箇所については適宜報告されるようになった。マニュアル作りは大切であるが、マニュアルを作る過程で危機管理意識が更に高まったように思う。

事故等の際の対応マニュアルはすでにできていた。今回のマニュアルは事故を起こさないためのマニュアルである。そして日本人学校では約3年毎に職員が入れ替わるという点から毎年の引き継ぎを特に大切にすることを全体で確認し合った。

年度末に病院で治療を受けなければならない程度の怪我について、運営理事会で報告するよう運営理事長の指示があった。2年目が終わる時である。20数件の報告をした。それでも1年目よりはかなり少なくなっていた。3年目はそれが一桁になった。怪我は渾身の注意を払っていても起こることはある。人間がするのだから注意が十分ではない時もある。しかし考えられる注意を払うことにより怪我を少なくできたのは大きな成果と考えられる。

在外ということで過去に様々な問題があったことから、子どもだけでなく、教職員および配偶者の危機管理の見直しも行った。重大事故に備え、全職員に緊急安全カード作成し配付した。連絡先や血液型などを記入しており、自分の意識がない場合を想定して作った。

中国国内の生活上の安全面（食、住、交通、治安、環境等）について職員全員を対象に年1回研修を行うことも決定し、行なうようにした。また、色々な情報をタイムリーに知らせてくれる大使館のメールマガジンに登録することも全職員に指示し、常に安全面への注意喚起を行なった。

また心の健康という意味で、運営理事長の大きな後押しがあり、運営理事会で承認を得て常勤のスクールカウンセラーを雇用できたことは大きな前進であった。内容は様々だが、年間大小400件以上の相談件数があり、その相談活動が実施できたことは大きな成果といえる。

一般教職員と違い校長は学校教育の管理、児童生徒の管理、教職員の管理、学校施設の管理、外国人教員を含め人事の管理など、すべてに亘って把握し、課題に対して適切な対応が求められる。中国で学んだことの大きな一つは、事前に対応をマニュアル化しておくことはもちろん大切だが、実際にことが起こった時にどうすばやく対応するかが試されるということである。いかに早く教職員と協議し、また日本大使館や学校運営理事会と相談し、色々なアドバイスを頂きながら対応するかということである。当然のことながら、両者はなくてはならない存在である。お陰さまで、数々の突発的な、あるいは緊急の大きな問題をその都度解決することができたと思う。



万里の長城への遠足